

論文

ニューカマーの日韓ダブルの「祖国留学」から見る エスニックアイデンティティの考察

——オールドカマーとの比較から——

今 里 基*

1 はじめに

日本は戦後、小熊英二（1995）が述べるように、「単一民族国家」が主張される時代が長らく続いた。しかし実態は、戦前の朝鮮半島から日本に渡り、様々な事情で日本に残ることになった在日朝鮮人¹をはじめ、アイヌ民族や沖縄の琉球民族に至るまで複数の民族が居住する国家であった。在日朝鮮人については1世から3世まで、世代別に在日朝鮮人とマジョリティである日本社会との歴史的、法制度的な部分及び階層的な関係性や、差別的な眼差し、排他的な対応に対するアイデンティティ・ポリティクス（金1999、リャン2005）、在日朝鮮人が自身のアイデンティティをめぐる葛藤やジレンマが厚みをもって論じられてきた（福岡1993）。だが、これらの研究は、在日朝鮮人の中でも、オールドカマーと呼ばれる人たちを対象としたものである。在日朝鮮人と呼ばれる朝鮮半島にルーツを持つ人々は大きく分けて、オールドカマーと韓国系ニューカマーに分類される²。このうち韓国系ニューカマーに関する研究は管見する限り、韓国系ニューカマーの家庭内使用言語と学校選択の観点に関する金花芬・安本博司（2011）の研究や、母語継承をめぐる安本博司（2013）など、親である1世の子供の韓国語使用をめぐる戦略に絞られており、前者に比べて立ち遅れてきた。

オールドカマーと韓国系ニューカマーの若者は現在、前者で3世や4世、後者は2世になる。さらには、オールドカマーと韓国系ニューカマーの若者それぞれにダブル³が存在する。ダブルまで含めた上で、その両者を比較した際にどんな差異があるだろうか。オールドカマーの3世や4世の親であるオールドカマー2世（あるいは3世）が若者であった1970年代などには就職差別や指紋押捺問題などがあり、アイデンティティ・ポリティクスが盛んな時代であった。近年はコリアンに対するヘイトスピーチが起きるようになり、かつてとは異なるアイデンティティ・ポリティクスが展開しており、日本に住むニューカマーも含めたコリアンに対してまだまだ根強い差別がある⁴としても、表立った差別的な発言や言動がまかり通るという時代ではなくなったはずだ。現代のオールドカマーと韓国系ニューカマーの若者たちのルーツやアイデンティティに対する考え方は個人が置かれた環境や遭遇した経験により多様化し、より捉えがたいものになっているだろう⁵。ただし、ふだんは自らのルーツやアイデンティティを特別に意識しない／語らない若者も含めて、オールドカマーと韓国系ニューカマーの若者に共通して、自らのルーツやアイデンティティに否応なく向き合う機会として、「祖国留学」がある。

祖国留学に関する先行研究もオールドカマーに関するものがほとんどである。「祖国留学」は、オールドカマーの文脈では1962年に始まった在日本大韓国民団（民団）が中心となって始めた制度であるが、現在ではオールドカマーが祖国である韓国に留学をすること全般に意味が広がっている。日本語の文献に関しては鄭幸子（2010）が、4名のオールドカマーへの聞き取り調査を基にして「言語」と「被差別体験」が韓国留学におけるオールドカマーのエスニックアイデンティティに影響を与えることを論じている。韓国語における先行研究を見ると、李ジョンフン

キーワード：ダブル、祖国留学、韓国、朝鮮半島、移民

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2016年度3年次転入学 共生領域

(1997) が韓国に留学したオールドカマーを対象に調査とインタビューを実施し、彼らの祖国留学の意味と韓国社会への適応について明らかにすることを試みているが、既に20年近く経っており、参考とするのは難しい。近年では尹ダイン(2014)がソウル大学の修士論文においてオールドカマーの「祖国留学」当事者へのインタビューから、留学を通して本国の韓国人との接触を経ることで主に3つのタイプのアイデンティティの変容があることを明らかにしている。ひとつは割合として大多数を占める在日的エスニックアイデンティティが強化されるようになった者、残りはいずれも少数ではあるが、韓国的アイデンティティが強化された者と留学を通して自身の日本(人)的な要素を再発見した者である。尹が指摘している「在日的エスニックアイデンティティが強化されるようになった者」については、季刊三千里(1975)のオールドカマー2世の若者に対する座談会にて、祖国留学経験をした者から同様の内容の発言がなされており、かつてと変わらない傾向を示しているとみることができる。

一方、近年日韓ダブルを含む韓国系ニューカマー2世も大学生ほどの年齢に達したことを受け、日本生まれ日本育ちの彼・彼女らも祖国へ留学をするようになった。では彼・彼女たちは、「祖国留学」を通じて同じようなアイデンティティの葛藤や変化がみられるのだろうか。オールドカマーとニューカマーでは、親である1世の流入経緯による対日意識には違いがある。オールドカマーに関しては、上述した通り、1世の時代から現在に至るまでマジョリティから差別を受けてきたという経緯があり、それに対抗するためのアイデンティティ・ポリティクスが盛んである。このような背景は、祖国留学を通じて、日本人ではないが、しかし韓国人でもなかったという葛藤を経ることで、そのどちらでもない「在日」という意識に新たな意味づけがなされる(尹2014)こと的前提となっている。一方、韓国系ニューカマー1世の流入経緯は、植民地時代の歴史的な負の側面によるものとは異なる。東京の新大久保のコリアンタウンの韓国系ニューカマーの経営者への調査を行った朴正義(2014)によれば、彼らの来日動機のあわせて8割が「留学」と「仕事」である(朴正義2014:14)。また、彼らはオールドカマーのような複雑な移住の経緯を持たないだけでなく、集住性が低く⁶、個々が日本各地に散らばって居住している。彼らの子供は、オールドカマーの同じ世代(3世あるいは4世)よりも「在日」コミュニティや「在日」としてのアイデンティティ・ポリティクスにコミットする機会は少ないと推測される。そのようなニューカマーの若者たちも、留学を通じてオールドカマーのように「在日」としてのアイデンティティが強化あるいは再定義されるのだろうか。

以上の問題関心から、本論文では、韓国系ニューカマーの祖国留学に伴うアイデンティティの変容を検討する。ただし、やや論点が複雑になるが、本論文で主対象としたのは韓国系ニューカマーのうち日韓ダブルの若者である。その理由は、大きくふたつある。

第一に、日本における朝鮮半島にルーツを持つ者のマジョリティが、日韓ダブルとなっているという現実である。統計を例にとれば、在日朝鮮人のうち日本人と婚姻した割合は、2013年度で87.7%と9割近くを占めている。1955年度に30.5%だったのと比較するとその様相は大きく変化した⁷。統計上オールドカマーとニューカマーは区別されていないが、ダブルの場合、2015年の1年間だけでも4210人が誕生しているため、人口が非常に少ない韓国系ニューカマー2世の中でも比較調査が可能であると判断された。

第二に、祖国留学者の属性についての従来研究には偏りがあり、祖国留学の文脈で「ダブル」という概念が十分に主題化されてこなかった点である。在日朝鮮人のダブルに関しては、古くは1970年代に雑誌や学術誌に当事者の主張や当事者が通う学校の教師らの意見が散見されるが⁸、本格的に在日朝鮮人とのダブルに関する考察が始まったのは李洪章(2008)によれば、90年代後半からである。それらの研究の主目的は、「純血」の在日朝鮮人の視点からの本質主義的な「民族」観や「血統」イデオロギーを批判し、その暴力性を解体し、対話の実践を目指す研究であった。李(2008)自身は在日朝鮮人のダブル当事者による戦略的な自己肯定の語りを考察し、彼らが日本人として自己を位置づけても、「在日」に自己を位置づけても抱える矛盾や違和感に対する葛藤を経て、「ダブルであることにとらわれない」とする自己規定を獲得した、ふたりの異なる日韓ダブルを取り上げている。川端洋平(2014)が述べるように、コリアンは、見かけで判断されがちな人種とは異なり、外見では判断されない他者性を備えているが、日本ではそうした他者性を積極的に呈示することで被る差別や葛藤だけでなく、呈示しなければ他者性そのものが無視されるという「無微化の暴力」⁹も働いている。この無微化の暴力は、日韓ダブルの場合、マジョリティの日本人だけでなく「在日」による運動体のマジョリティからも受けるという困難性を抱えるとされるのである。

これらの「ダブル」をめぐる議論を踏まえると、オールドカマーの祖国留学では「日本人」や「現地の韓国人」

と自身との関係や差異に発生する葛藤を経て「在日」というアイデンティティが強化／再定義されるという従来の議論に対して、もしニューカマーがこの議論の枠組みに当てはまらないとしたら、「ダブル」であること自体がいかにかに経験され、どう捉えなおされるかが彼らの祖国留学を通じたアイデンティティの変容を理解する新たな論点となりうるかと仮定できる。

そこで本論文は、ニューカマー日韓ダブルの若者たちがどのような動機で祖国留学をし、留学先でどのような経験をし、それが自らのアイデンティティの規定にいかなる変化をもたらしたのか／もたらさなかったのかを、従来のオールドカマーの祖国留学に関する研究結果と対照させつつ、明らかにする。それを通じて、本論文ではオールドカマーとは異なりうる、韓国系ニューカマーの日韓ダブルの若者のアイデンティティを検討する上で糸口となる視座について検討したい。

なお、詳細は次章にて述べるが、本論文のインタビュー協力者は全て女性である。これは、特に二重国籍を持つ男性のニューカマーの場合、韓国は徴兵制度があるため、「留学」という括りでは分析しがたい側面があり¹⁰、今回は上述したオールドカマーの先行研究と同様に女性に限定して考察を行うこととした。また、インタビューの分析の一部にはアメリカの移民学者であるルンバルト・ポルテス (Rumbaut and Portes 2001=2014) が用いた、移民第2世代に対する文化変容に関する分類を使用している。分類に関する詳細は後述するが、これは現状の日本におけるニューカマーの日韓ダブルも含めた韓国系ニューカマーにおけるエスニックアイデンティティの観点からの分析の試みが乏しいからである。そのため本論文においては理論的な試みとして、アメリカの文化変容に関する理論的枠組みを援用する形でアイデンティティに関する検討を行うこととする。

2 調査対象者と調査の概要

2-1 インタビューの対象者について

インタビューは、日本国内で小学校から高校までの教育を受け、かつ両親のどちらか一方が少なくとも韓国出身で、1965年の日韓国交正常化以降に来日した者の子供を対象とした。対象年齢は、18歳から30歳をその範囲に設定した。性別は上述の主題の関係上、全員女性である。そのうち今回は条件の異なるダブルの女性3人についてとりあげることにする。以下の表が今回の対象者のプロフィールの一覧である。

表 インタビュー対象者のプロフィール

対象者	A	B	C
出身	神奈川	埼玉	埼玉
母語	日本語	日本語	日本語
年齢(初回のインタビュー時点) ¹¹	20	20	20
家族構成	両親、弟2人	両親(一人っ子)	両親、妹
国籍	日本	日本	日本/韓国
学歴	小・中：日本公立→高：日本私立→韓国私立大学	小・中：日本公立→高：日本公立→専門学校→韓国私立大学	小・中：日本公立→高：日本公立→日本私立大学(韓国留学有)
2016年8月現在で韓国における教育を受けた年数	3年6か月(うち1年は語学堂)	1年6か月	1年(交換留学)

2-2 インタビューの概要及び方法

インタビューは2015年4月、2015年9月に複数回実施した。面接形式でインタビュー対象者のライフストーリーを聞くというスタイルで実施した。また、それ以降もSNSにて追加のインタビューを逐次実施している¹²。面接は東京都内、韓国の釜山広域市のカフェやファミリーレストランで実施した。事前に設問を準備した上で実施したが、対象者からの聞き取りと対話を重視する非構造化形式のインタビュー方式を採用し、事前に用意した質問を順番に聞くわけではなく、話の流れでランダムに聞いていった。時間は、毎回2時間前後を予定していたが、それを越えることもあった。インタビューは対象者に事前に許可をとった上でレコーダーにて録音し、文字化した資料は倫理

的配慮から後日対象者にその内容の確認を行った。使用言語は日本語であった。なお、Cのインタビューの際は、Cの母親（日本国籍）も同席した。

3 インタビューの結果 ——マジョリティでもオールドカマーでもない「私」——

本節では、ニューカマーの日韓ダブルが語ったライフストーリーから、①留学前の日本における言語使用や家庭状況、②留学の経緯、③留学後を通じた変化（対日本人観や自らのアイデンティティ）について、オールドカマーの先行研究と比較参照しながら、その類似点と相違点を考察する。

3-1 留学前の家庭状況と言語環境

オールドカマーの祖国留学を検討した先行研究ではしばしば韓国的な習慣や韓国語能力をはぐくむ家庭環境が注目される。鄭（2010）¹³は、両親が韓国を意識したことを子供にさせるケースとそうではないケースの両方があることを述べている。例えば、チュサ（祭祀）をしたり、住んでいる場所で自分たちの家族以外韓国人がいないにもかかわらず「両親が夏休みの研究発表で絶対韓国のことについてやらせる（鄭 2010:63）」家庭がある一方で、「ほんともう日本人みたいに暮らしてますけど（鄭 2010:66）」といった家庭もある。言語環境に関しても、韓国語が聞こえる環境とそうではない環境がある。生まれた時から毎年かならず韓国に行っていたため、耳は慣れていたと語られるケースもあれば、韓国語は全くできないに近い状態だったという事例もあった。ただし、それぞれ周囲の環境や両親から在日であることを意識するような機会が提供されていた。

本研究の調査協力者であるニューカマーの日韓ダブルの若者3名の母語は全員、日本語である。全員が韓国の大学での教育を受けている／受けた経験があるため、インタビュー実施時点において韓国語を話せない者はいなかったが、留学前の家庭での韓国語の使用状況に関する回答からは、彼女たちは基本的に日本語で生活しており、韓国語使用頻度は高くなかったことが示された。また韓国語と自身のアイデンティティを直接、結びつける語りも得られなかった。以下、具体的な回答を提示する。

3人ともに共通して言えることとして、高校まで一貫して日本の学校の経験しかなく、家庭内においても韓国語を求められる環境ではなかった点が挙げられる。

Aは、日本で居住していた頃の家庭内の会話は両親も含めて日本語であった。Aは、父親が日本人で母親が韓国系ニューカマーであり、二人は90年代に日本で出会って結婚している。Aは子供の頃は韓国語にそれほど関心がなく、母親が参加する韓国人コミュニティの中でたまに聞く程度であったという。また、母が怒ったときに韓国語で言うのを聞いても、「勝手に言って勝手にキレた」と感じる程度であったという。高校では国際コースを専攻したため、複数の外国語を学んでおり、その後の進路選択の過程においてK-POP（韓国のポピュラー音楽の総称）に関心を持ったことを理由に、高校3年生の時に韓国の大学への進学を希望し、韓国語の勉強を日本で本格的に始め¹⁴、高校卒業後に韓国にて現在の大学の付属の語学堂¹⁵でさらに1年間学んだ。現在では聞き取りはできるものの、話すのには未だ自信がないと語る。

Bも、家庭内の言語は日本語であった。Bは、父親が韓国人ニューカマーで母親が日本人である。小さいころこそ韓国語を学習ソフトで学ぶ機会があったものの、それは遊び程度のものであったと語る。また、父親が日本と韓国を行ったり来たりする生活だったこともあり、韓国語に接する機会はA以上に少なかったと推定される。本格的に韓国語を勉強するきっかけとなったものは、自分のルーツもあるが、Aと同様にK-POPを好きになった影響が大きかった。そこで高校卒業後に進学した専門学校では、韓国語を専門に勉強するようになった。専門学校の卒業後に韓国の大学に編入した。しかし、家庭内の会話や日常生活は、父も含めほとんど日本語であった。

最後にCは、生まれた時から父親が韓国語に慣れさせようとしていたこともあり、言葉そのものは理解できなくても耳の中にはどこか慣れたものがあつたようだ。ただし、家族内での会話は父親が日本語に少し不自由な部分はあるものの、AとB同様に日本語である。また、高校生の時と大学1年生の時の韓国への短期留学、さらに1年間の長期留学を経験したため、「聞くことと話すことは大丈夫」であるが、読むのは苦手であるという。一方で、10年前に父親が韓国に帰国したため、今は日本人の母親と妹と3人暮らしで、父親がいた頃に比べると日本において直

接韓国的な習慣などに触れる機会は減少している。

以上の3人とオールドカマーの留学経験者の言語や家庭環境からは、韓国語を耳にできる環境もあるが、基本的には日本語で生活していたことが明らかである。また、両親による習慣や韓国語の獲得に対する特段の介入も見られない。3人の親は環境こそ与えていたが、彼女たちに韓国語を積極的に学ばせようとすることはなかった。オールドカマーの中にも留学前は日本の生活をしており、韓国語能力や韓国の習慣になじみがなかった者もいる一方で、オールドカマーの場合は後述するような成長過程におけるルーツを求めさせる意識の醸成が、彼らを留学に向かわせる影響は大きい。だが、少なくとも調査対象のニューカマーの日韓ダブルについては、言語とアイデンティティが直接的に結びついた事例はなかった。

3-2 留学の理由

聞き取り対象者3名にそれぞれに留学した理由を聞いたところ、オールドカマーの場合とは違った面が強調された。尹(2014)は、オールドカマーの留学の動機には、①ルーツ探し、②留学、③履歴づくり、④脱日本、⑤韓流の影響があり、それらが複合的に組み合わせられていると指摘する。また鄭(2010)が提示する4つの事例には、「親から日本の大学に落ちたら韓国の大学に行きなさい」や「外国へ留学できる機会だった」、「韓国で韓国語ができないと現地の人から言われて悔しかった」などが提示されている。それに対して本論文の調査対象であるニューカマーの日韓ダブルの回答は次のとおりである。

3人全員の留学の動機には共通してK-POPの影響があった。Aは元々外国に関心があり、当初はアメリカに留学したかったそうである。しかし、高校在学中に大学への進路を考えた際に中学の時に韓国に行ったことを思い出したこと、K-POPが好きだったこと、それに加えて自身が韓国人の母と日本人の父の間に生まれた「ダブル」であったにもかかわらず韓国語が話せなかったことを残念に思い、韓国の大学を選択した。

Bが韓国に留学した理由には前述の通り、K-POPの影響が大きかった。筆者がルーツへの関心について尋ねたところ、父親が仕事の関係で日韓を行き来しているせいでルーツの最も身近な存在となる父親に接触する機会は少なかったものの、仮にK-POPの影響がなかったとしても、時期はもっと遅いにせよ韓国に留学していたかもしれないと回答した。ただし留学自体は、自身のルーツよりもK-POPの要因が大きく、K-POPが留学のタイミングを早ませたとのことだった。

Cの留学を決意した背景の遠因にもK-POPの影響がある。ただしCは、高校と大学1年の間に何度か短期留学として韓国に渡航しており、韓国にはなじみがあった。また現在の大学での専攻が日本語教育のCは、日本語教育を学べる大学を留学先として選択したという。Cは、何が学べるかがルーツについて知りたいといった考えよりも優先されたと語る。

以上のニューカマーの日韓ダブルが語った祖国留学の動機には、尹がオールドカマーで提示した①ルーツ探し、②留学、③履歴づくり、④脱日本、⑤韓流の影響のうち、①、②、⑤の3つが発現していた。ただしニューカマーの日韓ダブルの3人の場合、⑤が最も動機として強く、①が最も弱いようだ。最終的な選択としてルーツである韓国を求めたという面はあるものの、そこにはかつてのオールドカマーが希求したルーツ探しや、脱日本を渴望する背景となる、アイデンティティの葛藤はインタビューでは語られなかった。これにはインタビュアーである筆者が日本人であることも関係していると思われるが、日本社会における被差別体験が少ないことがより大きく左右していると推測された。また彼女たちには、「在日」や韓国系のコミュニティや運動と関わりをもった経験もなかった。では、ニューカマーの日韓ダブルの「祖国」への留学経験は彼女たちに何をもたらしたのだろうか。

3-3 留学後の変化

次に彼女たちの留学後の心境の変化を中心に述べる。まず先行研究においてオールドカマーの場合、祖国留学後、本国の韓国人との出会いを通して日本に生まれ育った自分との差異が強調されることが多い。例えば、鄭(2010)でのオールドカマーの発言からは、「日本の方が全然礼儀正しい」「(韓国人は)馴れ馴れしかったりストレートだったりして精神的に負担が掛かったりする」などの本国の韓国人への不満が窺える。さらに韓国へ来てから「韓国語ができない」ことや「チョッパリ¹⁶⁾」などの暴言を吐かれたなどの直接的な差別を受けたことも語っている。また

同時に、オールドカマーの祖国留学を扱った研究では、そのような本国の韓国人との出会いにより自身が「韓国人ではない」と気づく一方で、自身のアイデンティティを日本人として設定することの困難も描かれる。これに対して、ニューカマーの日韓ダブルの彼女たちはいずれも留学後に気づいた韓国人と自身との差異を、「外見」と「言語」の二つに焦点をあてて説明した。

Aは、留学後も自分自身としては「基本は変わっていない」と前置きしつつ、次のように述べた。

(留学中の韓国の大学の)先生が「何年韓国にいるの」って言ってきて、「2年います」って言ったら、それだけいるから染まったのねっていう感じのニュアンスで言われたので、その時に私実は日韓ハーフなんですよといったら、「あーっ！」みたいな。だからかもねって。やっぱりハーフだから、血は結構強いんじゃないのって。あと、日本人とか韓国人とかいっぱい見えてきているから、私はなんとなくわかるって言われたんですけど、でも実際しゃべると日本人だねって言ってました。見た目は韓国っぽくて、韓国要素は感じるけど、しゃべると日本人だねって。¹⁷

Aはインタビュー中に自身が「ダブル」であることは、自分から告白しない限り、周囲の韓国人にほとんど露呈することはないと強調していた。その理由には立ち振る舞いなどもあるだろうが、Aにとっては「見た目」＝顔のつくりやファッションが韓国人に似ているという点が重要だった。ただし前項で説明したように、韓国語を話すのに自信がないと語るAは、言語を流暢に話せない。それゆえ、本国の韓国人からの評価は日本人であるし、自分自身の内面においても「基本的には変わらない」との回答に結びついている。Bは、自身は「日本人の典型的な性格」だと強調し、韓国人の性格とファッションに関して日本人とは違うと感じると語った。ファッションなどの表面的な部分に関心を持つ理由には、先に述べたK-POPや韓流ドラマなど留学前から韓国に対して関心を持っていた事柄そのものがファッションや外見だったことにもよると推定される。

またAとCは、留学後に韓国での生活になじむにつれて、日本人や日本社会に違和感や疑問を抱くようになったと述べた。例えば、Aは「韓国留学して日本人の社交辞令とか、オブラートに包んで言ったり、遠回しに言うのがすごい窮屈に感じるようになりました。(中略)変に氣遣われるより、ズバって言われる方が、居心地いいっていう風に、思うようになりました」と語る。またCは、留学前の日本での生活において、家族の方針で膝を立てて座ったり、ご飯をスプーンで食べるなどの韓国的な習慣を身につけていた¹⁸。彼女は、「留学したらがっつり韓国の文化に染まっちゃった」ので、帰ってきたときは「逆カルチャーショック」を受けたと語る。ただしここで重要な点は、こうしたことが「やはり自身が半分韓国人だから」といったかたちのアイデンティティをめぐる語りには直接的に結びつかないことである。Aが指摘するような内容はおそらく日本におけるコミュニケーションのあり方や日本社会に閉塞感を感じている多くの若者でも留学後に日本人や日本社会を振り返った時に語りうることであり、A自身も日本人に対する疑問をもつようになったことと、自身がダブルであることには直接的な関係はないと断言した。Cの場合も、韓国への短期留学などの経験が複数あり、さらに韓国的な習慣を日本の中で身につけているとはいえ、それらの韓国の習慣を身につけていた自身を「再確認」したようなものだと考えられる。

以上のように、韓国留学後の心境の変化として語られた内容には、彼女たちがニューカマーの日韓ダブルであることが特に影響を与えた点がみられなかった。また、本項の冒頭で引用したオールドカマーが語る、本国の韓国人から差別を受けたなどの負の経験についても、言語ができず困ったことはあったが、「差別」を受けた経験はないと語った。そこで、よりダイレクトにインタビュー時点のアイデンティティの所在について質問を試みた。

巻末のインタビューの設問の中で、「自分のアイデンティティはどこにあると考えますか？(韓国、カッコつきの「日本」、日本、どっちでもない)」という項目を用意した。協力者が強いて言うなら自分のアイデンティティはどの立ち位置にあると自覚しているかを把握する意図で、先述のルンバウト・ポルテス(Rumbaut and Portes 2001=2014)にて実施された調査の結果として分類された、①自分を外国人、すなわち出身国の人間とみなすアイデンティティ、②ハイフンつきのアメリカ人アイデンティティで、明確に自分がある一国の出身者として認識している者、③ハイフンなしのプレーンなアメリカ人、④パンエスニックなマイノリティ・グループのアイデンティティ¹⁹を参考に作成した。ルンバウト・ポルテスのこの立ち位置を問う設問は元々定量的な調査の下で想定された設問であり、今回

の質的調査には本来不向きなものであるが、アイデンティティの揺らぎのような点が見極めにくかったため、あくまでも参考として問うこととした。設問としては直接的に自己の所属意識を問いたす形になったが、質問の意図については十分な説明をおこない、対日意識やナショナリズムをめぐる問いとは切り離れたものであるという了解を事前に得た。その結果、よりオールドカマーの留学経験者との差異が明確になった。

まずAは「カッコつきの『日本』」と回答した。理由として、「見た目は韓国っぽい要素はあるが、話すと日本人」だという大学の先生からの指摘からそのように考えるようになったとする。それまでは、日本人にしか見られることがなかったとも答えているため、大学入学以後にアイデンティティの位置がやや変化しているようである。また、それとは別にAはCと大学の寮で同じ部屋に暮らしており、二人が仲良くなったきっかけは同じルーツを持っていることからだとも語っていることから、同じルーツを持つ者同士で住むことが「カッコつき」などの表現にあるようなアイデンティティの変化をもたらすと考えられる。

一方、Bは「日本」と回答した。その理由として「日本人として生きてきたから」を挙げる。補足として父親が韓国人であることを意識していたかどうかとも尋ねたが、「別にお父さん韓国人だし、私は日本で育った日本人だしみたいな」と淡々と割り切った回答をした。

最後にCはいずれでもなく自分は「半分半分」だと答えた。その理由を聞くと、「半々の生活をしているからじゃないですか。家でちょっと韓国よりな生活して、日本ではがっつり日本みたいな生活してるから」と回答した。ただし、先述した通り、韓国的な習慣を身につけていても、それが韓国人としてのこだわりのようなものに結びついてはおらず、あくまで偶然に、また自然にそうなったものとして捉えられていた。

AからCまで全員の回答から明らかなことは、そこにオールドカマーの回答にあったようなルーツの意識的な側面からの回答が見られなかったことである²⁰。

彼女たちは留学経験を通して韓国にルーツを持つことを多少意識するようになっていたが、それでもなおルーツと現在の「私」とのつながりを特別に意識せず、現在の自分が置かれた状況に即してアイデンティティを設定したという面が回答からは読み取れた。

以上、留学後の変化についてとりあげた。尹(2014)が示唆するように、オールドカマーの場合、留学した韓国において韓国人と交流した経験は、エスニックアイデンティティに多かれ少なかれ変化を与えた。それに対し、ニューカマーの日韓ダブルの彼女たちは韓国での経験から日本や日本人観を相対化したり、韓国や韓国人観を更新したものの、それを自分自身のアイデンティティや立ち位置の問題として捉えることはしていない。本国の韓国人と出会い、韓国語ができないことやそれゆえに扱いが違うことに苛立ちはあっても、それはあくまで「いまだ」できない自身の問題であり、自身の属性の問題とはされないのである。

4 おわりに

本論文では、オールドカマーの祖国留学をめぐる議論と対照させつつ、日韓ダブルのニューカマーの祖国留学に向かう動機、祖国留学を通じた経験を通じた彼女たちのルーツやアイデンティティに対する意識の変化を明らかにしようと試みてきた。それを通じて、オールドカマーとは異なりうる、ニューカマーの日韓ダブルの彼女たち独自のアイデンティティのありかたを論じる糸口を探ることを企図した。以下ではまず、インタビューの結果から明らかになった点を整理したい。

オールドカマーの祖国留学をめぐる研究では、彼らが「日本」と「祖国(韓国)」とのほぎまで「在日」というアイデンティティを意味づけ直すことが指摘されてきた。しかし、ニューカマーの日韓ダブルの祖国留学をめぐる語りからは、「在日」という表現は出現せず、生まれ育った日本と、ルーツとしての韓国という二項対立のはぎまでアイデンティティを検討すること自体に疑問を持ちうる結果が出た。

聞き取り対象者のニューカマーの日韓ダブルたちは、親から韓国語を学ぶ環境は提供されていたものの、韓国語の獲得をルーツの継承として強く求められたわけではなかった。少なくとも彼女たち自身は韓国語を耳にしたり、韓国式の食生活があったりしたが、自身の家庭環境は「普通の日本の家庭環境」と変わらないと認識していた。留学の経緯についても、ルーツを追い求める、差別的／窮屈な日本からの脱出といったものよりも、K-POPや韓流ブー

ムなどのポピュラーカルチャーへの興味関心が先行していた。そのような彼女たちは留学後の心境の変化においても、日本の若者が海外で経験しうるような「カルチャーショック」を淡々と語り、「ダブル」という枠組み自体に特別なこだわりをもつこと自体を否定した。だが、それは冒頭で取り上げた李 (2008) が論じるような、日本人として自己を位置づけても韓国人として／在日として自己を位置づけても違和感や矛盾を抱えるという二重の葛藤の末にたどりついた、ダブルであることに対するこだわりの溶解とは本質的に異なっている。それでは、彼女たちの自己規定をどのようなものとして特徴づけることができるだろうか。

戴エイカ (2005) は、同性愛、または同性愛者に対して差別や混乱が起きるプロセスを説明したセジウィックの議論を援用し、台湾系日本人の「日本人」意識について「われわれ日本人」と「純粋な日本人」という二つの言説で説明した。「われわれ日本人」という意識は、「外人」の想像と日本人内部の同一性の想像により反照的に築かれた『日本人同士』ならお互いに分かり合えるとか、自然に同情できるという勝手な思い込み (戴 2005:59) をさし、国民文化論や国民史、国語といった「共感の装置」によって築かれ、伝播される。これに対して「純粋な日本人」とは、『日本民族の血』をひき、『日本文化』を内面化し、日本国籍をもっている人たち (戴 2005:59) をさし、すべての条件で日本人であると思う人たちが心のどこかで自己了解をする、あるいはいずれかの条件において「日本人ではない」と思う人たちが自己了解するときの「日本イメージ」となる。戴は、この「純粋な日本人」という概念にかかわる言説が、「われわれ日本人」という思いが共有される範囲を限定しようとするとき、ふたつの言説の挟に置かれた人が抱える自己規定の矛盾を乗り越える方途として、自己の中に複数の文化やアイデンティティの共生を取り込み、「純粋な日本人」「われわれ日本人」双方の概念を流動化させ、「内なる国境」を模索するあり方を提示している。

本論文で取り上げたニューカマー日韓ダブルの彼女たちは、戴が述べるどころの「われわれ日本人」という思いに基づく「日本人」意識を内面化している。それは「日本人の典型的な性格」「別にお父さん韓国人だし、私は日本で育った日本人だしみたいな」といった言葉によく示される。だが、彼女たちは「純粋な日本人」と「われわれ日本人」との間の矛盾を、「われわれ日本人」に基づく「日本人」意識に取り込む形で自己規定をしており、そこに葛藤や混乱は生じていないようにみえる。つまり、彼女たちにとって「血」や「ルーツ」「二重国籍 (C)」は、「共感の文化装置」によって成長過程で自然に築かれた「われわれ日本人」意識を揺るがすものではなかった。この「われわれ日本人」意識に規定されたアイデンティティは、「祖国留学」での経験においても強固に維持されていた。彼女たちは、「血」に「韓国人と顔のつくりが似ている」理由を好意的に見出したりするが、言語が完璧ではなかったり、ファッションの嗜好性や「日本人」的な性格が変化しない限り、基本的に留学前と変わらない「日本人」「もともと半々」のアイデンティティのままである。

この背景には、冒頭で述べたように「在日」のコミュニティやアイデンティティ・ポリティクスと距離を置いて暮らす彼女たちが「純粋な日本人」の概念によって「偶然」に具体的な困難に陥った経験が少なかったためであるだろう。あるいは戴の議論に倣って「われわれ日本人」を作り上げる「共感の装置」が強固であるという見方もできるかもしれない。だが、ここでもう一つ注目したい点は、彼女たちは「家でちょっと韓国よりな生活して、日本ではがつつり日本みたいな生活してるから」、自己の位置取りを「半々」だと語ったり、「同じルーツをもつルームメイトと暮らす」と「カッコつき」の日本人になったりと状況に応じた自己規定を一貫して語ったことである。「言語ができないから」「性格が変わらないから」日本人だという彼女たちは、逆に言えば、韓国での生活を通じて言語や性格が変化すれば「われわれ韓国人」意識を備えた別の人間なりうる可能性も示唆しているともいえる。このように捉えると、彼女たちのアイデンティティは、自己が置かれた状況の積み重ねにより「～になる」ことの変身可能性に常に開かれた、徹底して「述語的」なものとしてみることもできるのではないだろうか。趙貫花 (2016) は、多言語を操り、言語文化的な側面から複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体においてその都度自らを規定し直し、活路を開く中国朝鮮族のアイデンティティを「ハイブリッド・アイデンティティ」という用語で表現したが、本論文で扱ったニューカマー日韓ダブルのアイデンティティは、より偶発的な出来事や行為の積み重ねによって事後的に生み出されるもののように思われる。今後は、彼女たちの変身可能性、アイデンティティの可変性を、より長期的なスパンで日本と片方のルーツである韓国、あるいはさらに第三国への移住経験をもつ人々を対象に検討したい。

【付録】インタビューにおける設問項目（1 度目）

下記の設問にそってインタビューを実施した。なお、掲載している設問項目は順不同である。

（基礎項目）

- ・何年生まれか？
- ・性別は何か？
- ・職業（あるいは学生か）は何か？
- ・国籍は何であるか？

（質問項目）

- ・通名（あるいは民族名）を名乗っていますか？
- ・（名乗っている場合）隠していたことがありますか？
- ・人生の中で民族意識を高めるような出来事や機会はありましたか？（差別や家庭内での民族行事、学校やサークルで民族団体に加入するとか）
- ・自らの朝鮮半島とのつながりを意識することはありますか？
- ・本国の韓国人と違うと感じることはありますか？
- ・日本に住んでいる中で朝鮮における伝統行事（旧正月、秋夕など）を実践していますか？
- ・家では何語で会話していますか？
- ・韓国語（あるいは朝鮮語）をどれくらいできますか？
- ・戦争体験（太平洋戦争や朝鮮戦争）を直接聞いたことはありますか？
- ・学校はどこに通っていましたか？（日本の学校か、民族学校か）
- ・友達は日本人と韓国人、どちらのほうが多いですか？
- ・朝鮮半島においてなにか事件が起きた場合に恐怖を感じることはありますか？
- ・韓国人であることが嫌に思えたことはありますか？
- ・（国籍が日本じゃない場合）将来に帰化する考えはありますか？
- ・（国籍が日本の場合）なぜ帰化を選択しましたか？

インタビューにおける設問項目（2 度目）

（親及び家族に関する設問）

- ・親はなぜ日本にきたかを聞いたことありますか？
 - ・親の日本語能力はどれくらいですか？
 - ・親の職業は何ですか？
 - ・自分や家族が生活していく中で困難や問題を抱えていた時期はありますか？また、あればそれはいつで、具体的にどんなことでしたか？
 - ・（家族に関する関連で）困難などにぶち当たったときに心の支えはありましたか？
- （さらにそれに関連して）あなたは何か宗教を持っていますか？また、宗教を持っている人はそのきっかけはなんですか？

（学校に関する設問）

- ・中学から高校にかけて勉強はどうでしたか？（時間や状況、成績など）
- ・どのような学校に通っていましたか？
- ・中学・高校の成績（相対的な位置）を教えてください。

(その他の設問)

- ・あなたが韓国に対する差別や偏見がこれから悪化したら、たとえば署名活動やデモなどに参加しようと考えますか？
- ・自分のアイデンティティはどこにあると考えますか？（韓国、どっちでもない、カッコつきの「日本」、日本）
- ・韓国系ニューカマーは他のニューカマーと比べてどうだと考えますか？

[注]

- 1 朝鮮半島にルーツを持つ人々の呼称に関しては様々あるが、本論文では朝鮮半島にルーツをもつ人々に関して、在日という呼称をつける必要がある場合に関しては、朝鮮半島にルーツをもつ人々を意味して、在日朝鮮人と呼称する。
- 2 両者をどこで線引きするかは1945年以降、1980年代以降など説がいくつかあるが、本論文においては1965年の日韓国交正常化以降に来日した者をニューカマーとすることとする。また、ニューカマーとはいくつかの説があるものの、戦後のいずれかの時期に来日した外国人を指す。一方、オールドカマーはごく少数の在日台湾人も含むものの、それはイコール在日朝鮮人のことを意味している。このため戦後に来日した外国人の中には、戦後に来日した韓国人もニューカマーとして含まれる。従って、ニューカマーの中でも韓国人を指す場合は韓国系ニューカマーと表記する。
- 3 日本人と外国人の両親の間に生まれた子供の呼称に関しては戦後「ハーフ」という呼称が長らく使用されてきたが、近年では「ハーフ」という言葉そのものに疑問が持たれるようになり、「ダブル」や「ミックス」など外国にルーツがあることを意味する子供の呼称が新たに生まれることとなった。本論文では、そのうちのハーフ以外で比較的多用されている「ダブル」を用いることとする。
- 4 新大久保のコリアンタウンの日本人住民が在日朝鮮人に対して嫌悪を示している姿が金守香（2013）の調査結果の中に一部、描かれている。
- 5 当事者性を喪失したオールドカマーの3世や4世へのインタビュー調査による松岡瑛理（2014）の論考がある。
- 6 オールドカマーとニューカマー全体に関する集住の変化の比較は福本拓（2010）に詳しい。
- 7 在日本大韓国民団「4. 婚姻状況」<https://www.mindan.org/shokai/toukei.html#04>（最終閲覧日2016年12月4日）
- 8 管見する限り、李定次（1974）『「朝・日」混血として』『思想の科学 第6次』（32）、42-48、思想の科学社、野口徳治（1974）『日朝混血生徒Tを見すえるなかで——かれに生きていくための学力をつけるには』『朝鮮研究』（134）、17-21、日本朝鮮研究所、がある。
- 9 川端による具体例としては、「見た目ではいわゆるハーフとは判断されることのない在日ダブルは、在日という属性を明らかにすることで偏見や好奇の眼差しの対象になるリスクを抱える一方で、それを隠すことは無視されるに近い状況（川端2014:224）」ということがある。
- 10 2012年の韓国兵役法改正に伴い、外国で生まれた韓国国籍を持つ94年生まれ以降の男性は18歳から37歳までの間に通算3年以上韓国に滞在する場合は徴兵の義務が課されることになった。従って、日本生まれの日韓の二重国籍を持つダブルを含めた韓国系ニューカマーの男子が韓国の大学に進学する場合、徴兵がネックとなるため結果的に女子に比べその人数はかなり少ないと考えられる。
- 11 Aへの初回インタビューは2015年4月、BとCは2015年9月である。
- 12 韓国においては仕事などでも電子メールより、SMS同様にSNSでやり取りするケースが多い。このため、筆者も追加の質問の際には電子メールではなく、SNSでのやりとりを選択した。
- 13 鄭が行ったインタビューでは3人がオールドカマー同士の子供、1人が日韓のダブルにインタビューを行っている。
- 14 勉強自体は中学の時から始めていたとのことであった。
- 15 韓国において外国人が韓国語を学ぶ教育機関のこと。主に大学に設置されている。
- 16 本来は日本人に対する韓国人が日本人を表す際の蔑称。
- 17 聞き取りは2015年9月14日に行った。
- 18 これはインタビュー外の場面であるが、実際に筆者とインタビュー中に登場するAとCで日本国内の飲食店で食事をした時に、ご飯をスプーンですくって食べている光景が見られた。
- 19 ボルテス・ルンバウト（2001 = 2014）『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる「第三の道』、明石書店、pp.288-289
- 20 筆者はこの調査後にオールドカマーの留学経験者にも同内容でインタビューを行っているが、それも踏まえた分析は別稿に譲る。

[文献]

- 趙貴花, 2016, 『移動する人びとの教育と言語 中国朝鮮族に関するエスノグラフィ』三元社
- 鄭幸子, 2010, 「韓国社会と在日韓国人2世, 3世のアイデンティティの変容における一考察: 韓国留学経験者を中心に」『東アジア研究』54号, 61-78
- 福永拓, 2010, 「東京および大阪における在日外国人の空間的セグレーションの変化——『オールドカマー』と『ニューカマー』間の差異に着目して」『地理学評論』83巻3号 288-313
- 福岡正則, 1989, 『在日韓国・朝鮮人若い世代のアイデンティティ』中央公論社
- 교육부, 2016, 「2016년 국내 외국인 유학생 현황 정보공개」, 韓国教育部ホームページ, (2016年12月10日取得, <https://www.moe.go.kr/web/100088/ko/board/view.do?bbsId=350&pageSize=10¤tPage=0&encodeYn=&boardSeq=64729&mode=view>).
- 金花芬・安本博司, 2011, 「コリア系ニューカマーの教育戦略: 韓国人と朝鮮族の学校選択と家庭内使用言語を中心に」『人間社会学研究集録』6, 27-49
- 川端洋平, 2014, 「〈ダブル〉がイシュー化する境界域——異なるルーツが交錯する在日コリアンの語りから」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か』青弓社, 222-242
- 季刊三千里, 1975, 「在日二世の生活と意見」『季刊三千里』第8号, 三千里社, 46-57
- 金守香, 2013, 「『韓流』と『嫌韓』, そして『多文化共生』——『大久保』という立ち位置から」『社会デザイン学会 学会誌』Vol.5, 103-114
- 金泰泳, 1999, 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』世界思想社
- 李洪章, 2008, 「肯定性を生きる戦略としての『語り』と『対話』——在日朝鮮人=日本人間『ダブル』のライフ・ストーリーを事例として」『京都社会学年報』第16号, 75-96
- 李定次, 1974, 「『朝・日』混血として」『思想の科学 第6次』(32), 42-48
- 이정훈, 1997, 「재일동포의 민족 정체성에 관한 연구」고려대학교 대학원 석사논문 (=李ジョンフン, 1997, 『在日同胞のエスニックアイデンティティに関する研究』高麗大学大学院修士論文)
- 松岡瑛理, 2014, 「在日運動における『当事者性』はいかに効力を失ったか? ——在日韓国・朝鮮人=日本人間『ダブル/クォーター』への聞き取り調査を中心に」『年報社会学論集』27号, 170-183
- 野口徳治, 1974, 「日朝混血生徒Tを見ずえるなかで——かれに生きていくための学力をつけるには」『朝鮮研究』(134), 17-21, 日本朝鮮研究所
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社
- 朴正義, 2014, 『大久保コリアンタウンの人たち』, 国書刊行会
- Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut, 2001, "Ethnicities : children of immigrants in America" University of California Press, (= 2014, 村井忠政訳『現代アメリカ移民二世世代の研究: 移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』, 明石書店)
- ソニア・リャン, 2005, 『コリアン・ディアスポラ』明石書店
- 戴エイカ, 2005, 「『われわれ日本人』『純粋な日本人』そして『内なる越境』」『人種問題研究』5号, 大阪市立大学
- 安本博司, 2013, 「韓国人ニューカマーの母語継承に関する考察——在日との接触と意味づけの変遷に着目して」『人間社会学研究集録』8, 89-109
- 윤다인, 2014, 「『모국수학이 재일동포의 민족 정체성에 미치는 영향에 관한 연구』서울대학교 대학원 사회학과 2013년도 석사논문 (=尹ダイン, 2014, 『母国修学が在日同胞のエスニックアイデンティティに与える影響に関する研究』ソウル大学大学院社会学科 2013年度修士論文)
- 在日本大韓国民団, 2016, 「4. 婚姻状況」, 在日本大韓国民団ホームページ, (2016年12月10日取得, <https://www.mindan.org/shokai/toukei.html#04>).

A Study of the Ethnic Identity among Half-Japanese-Half-Korean Born in Japan and Visited Korea for Their Study

IMASATO Hajime

Abstract:

A little has been studied about half-Japanese-half-Korean, the children of Korean parents who came to Japan in last few decades. This paper focuses on their ethnic identity and aims to analyze fluctuation of their identity and changes of their position by visiting Korea for their university study. The research interviewed three of female half-Japanese-half-Korean university students born in Japan, before and after visiting Korea for their study, and applied type of acculturations by Portes and Rumbaut (2001). As a result, all interviewees were categorized as “Consonant Acculturation”, because their motivation were very similar to that of other Japanese in same generation, having interest in Korean popular music (K-POP) for example, and they faced no identity crisis after studying in Korea. The paper concludes that former analysis frameworks to contrast Japanese and Korean on their identity can be questioned.

Keywords: half-Japanese-and-half-Korean, Korea, second generation immigrants, acculturation, ethnic identity

ニューカマーの日韓ダブルの「祖国留学」から見る エスニックアイデンティティの考察 ——オールドカマーとの比較から——

今 里 基

要旨：

オールドカマーの祖国留学を扱った研究では、彼らが現地の韓国人と接触することで日本人ではないが、韓国人でもなかったという葛藤を抱え、「在日」としてのアイデンティティを意味づけ直すことが指摘されてきた。本稿は、これまで注目されてこなかったニューカマー日韓のダブル3人の女性による「祖国留学」を通じた心境の変化や「ダブル」としての自己規定のあり方を、聞き取り調査とポルテス・ルンバウトの文化変容理論を援用することで明らかにした。その結果、彼女達が留学の動機や留学後の自己規定の変化を、基本的には言語や性格などで規定される「われわれ日本人」意識に立脚して語ることが示唆された。以上を踏まえ、彼女達のアイデンティティをめぐる日本と韓国を対置させる従来の枠組みで論じる限界を指摘するとともに、移動に伴う言語能力の変化や文化の身体化に伴って柔軟に変化するアイデンティティのあり方を検討する必要性を指摘した。